様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１７日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７３０３２９
研究課題名（和文）　産業間における競争的相互作用を通じた経営資源の蓄積と利用のダイナミクス
研究課題名（英文）　Dynamics of Resource Accumulation and Utilization through Inter-industry Interaction
研究代表者
藤原　雅俊（FUJIWARA MASATOSHI）
京都産業大学・経営学部・准教授
研究者番号：20411019

研究成果の概要（和文）：
本研究では、複数の産業の相互作用を通じた経営資源の蓄積と利用のダイナミクスを分析した。インクジェット・プリンター産業を主たる分析対象とし、デジタル・カメラ産業との相互作用プロセスや、プリンター本体と消耗品であるインク・カートリッジとの相互作用プロセスを研究した。産業間の競争的な相互作用が、企業内における経営資源の蓄積と利用に対して与える影響およびそのメカニズムを明らかにすることで、より広い競争空間における多様な相互作用を想定した経営戦略論の可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：
In this project, I analyzed the dynamic process of resource accumulation and utilization through inter-industry interaction. Firstly, I focused on the interaction process of the inkjet printer industry and the digital camera industry. Secondly, I looked into the interaction process between actual printer and ink cartridge, which are sub-industries of inkjet printer industry. This project suggests that it is significant to build a strategy thinking about a broader competitive field and various interactions in the field.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：経営学
科研費の分科・細目：経営学･:経営学
キーワード：経営戦略、経営資源、産業間相互作用、多角化企業、イノベーション、技術転用

１．研究開始当初の背景

本研究を始めるにあたっては、理論的な背景と現象面での背景という、大きく二つの背景があった。

（１）理論的背景

研究開始当初に想定した理論的な背景としては、経営資源観（Resource-Based View）の分析視野を空間的に拡張することが挙げられる。

とかく一企業内の諸活動に分析の焦点が定まりがちであった経営資源観については、

より広い分析視野からのメカニズム解明が未だ十分に解明されていない重要課題になっていたように思われる。もちろんこの点については、全くの手つかずであったという訳ではなく、これまで経営戦略論で展開されてきた先行研究を辿ると、一産業内における競争プロセスが企業内部における経営資源の蓄積と利用活動にどのような影響を与えるかが論じられてきた。経営資源の蓄積と利用のプロセスは、もちろん一企業内における諸活動を通じて展開されるものだけれども、その諸活動に対して、企業間競争が何らかの重要な影響を及ぼしているという見方である。これにより、経営資源観の分析視野の拡張が徐々に進んできたものと考えられる。

この知見に基づいて、本研究プロジェクトでは、分析視野をさらに広げることを考えた。具体的に記すと、従来は一産業内での企業間競争に着目して経営資源の蓄積と利用プロセスを分析してきたけれども、分析視野をさらに広げ、産業間をまたいで展開される競争的な相互作用プロセスにまで拡張していくことを本研究は着想したのである。これが、理論的な研究背景である。

（２）現象面での背景

現象面での背景としては、ICT（Information and Communication Technology）化による影響を受けながら近年急速に進みつつある、製品の統合現象が挙げられる。スマートフォンのような携帯電話によって電話機能や時計機能、さらにはゲーム機能が統合されたり、事務機器のようにファクシミリやコピー機能、さらにはプリンター機能が統合されたりする事例が近年見られる。

複数機能が統合されることにより、それまで個別の産業としてそれぞれに発展してきた各種産業が一体化される。すると、例えばゲーム企業と携帯電話製造企業のように、これまでは別々の市場で生存し、直接の競争相手ではなかった企業同士が競争していかなければならない場面が増えてくるようになる。それは、まさに複数産業をまたいだ競争が複合化された市場の中で展開されるようになってきたことを示している。

こうした近年の経営現象から考えると、それまでの競争戦略論が想定してきた分析空間をより広くとり、産業間での相互作用プロセスにまで戦略思考の射程を広げる必要が生じてくると思われる。これが、本研究を始めるにあたって想定した現象面での背景である。

２．研究の目的

この研究の大きな目的は、産業間の相互作用プロセスに注目しながら、企業内部における経営資源の蓄積と利用メカニズムを明らかにすることである。この目的に沿って、本研究は、次の３つの問いを分析している。

（１）異なる複数の産業間でいったいどのような競争的相互作用が展開され、経営資源の蓄積と利用がどのように進むのか。

この問いでは、産業と産業の間に境界があるなかで、その境界をまたいでどのような競争的相互作用が展開され、どのように経営資源の蓄積と利用活動が展開していくのかを分析することを目指している。

（２）異なる複数の産業が統合されるとき、いったいどのような競争的相互作用が展開されることになるのか。それによって、経営資源はどのような展開過程を辿るのか。

この問いでは、産業と産業の間にあったはずの境界が次第に流動化して消えていくなかで、いったいどのような競争的相互作用が展開され、その相互作用が経営資源の蓄積と利用にどのような影響を与えるのかを分析することを目指している。

（３）産業が抱えるサブ産業間で、いったいどのような競争的相互作用が展開され、それが経営資源の蓄積と利用活動にどのような影響を与えるのか。

この問いでは、大きな産業と産業の間で認められる相互作用というよりも、一産業内に属するサブ産業間での相互作用プロセスに注目し、そこで展開される相互作用が経営資源の蓄積と利用活動にどのような影響を与えるのかを分析することを目指している。

以上のように、３つの異なる分析次元を想定しながら、それぞれ経営資源の発展プロセスとの関係を分析することが研究目的である。

３．研究の方法

この研究プロジェクトで採用した研究方法は、次の３つである。

（１）聞き取り調査に基づく定性調査

分析対象とした産業に属する企業および、その業界団体関係者への聞き取り調査を行った。聞き取り調査においては、バイアスをできる限り排除するため、半構造式面接法を採用した。

（２）聞き取り調査情報の定量化

聞き取り調査で得られた定性情報を、内容分析によって整理していくことで、定量化す

ることを試みた。具体的には、産業間相互作用を把握するために、ある産業が別のどの産業を意識しながら発言しているのかを整理し、その関係性を浮かび上がらせようと試みた。

（３）２次資料の分析

聞き取り調査には、後付けで組み立てられたストーリーが伝えられてしまうという問題がともなう。そうした事後的振り返りによるバイアスを回避するため、分析対象事例の当時の様子を伝える２次資料（新聞記事、雑誌記事、業界誌記事）を分析した。聞き取り調査から得られる情報と、当時に発信されていた２次資料の情報とを照合させながら、バイアスを丁寧に取り除き、より正確な現象理解に努めるようにした。

４．研究成果

以上の研究背景、研究目的、研究方法に基づいて遂行された今回の研究では、以下の３つの成果を挙げることができた。

（１）インクジェット・プリンター産業とデジタル・スチル・カメラ産業との相互作用プロセスに関する研究成果

インクジェット・プリンターの高解像度化とデジタル・スチル・カメラの高画素化が互いに進展していく現象を取り上げ、インクジェット・プリンター産業とデジタル・スチル・カメラ産業の相互作用プロセスについて明らかにした。この研究では、顧客が認知可能な水準を超えてもなお両製品の精細さが過剰に高まっていくメカニズムが明らかにされた。この過程で、インクジェット技術が他産業へ応用可能な程度にまで精細化され、深化していくことも指摘された。

（２）プリンターの複合化プロセス

デジタル化が進展していく中で、複写機やプリンターといった事務機器は、ファクシミリ機能やスキャニング機能、転送・編集機能など、実に多様な製品機能を内包するようになり、複合化が著しく進展した。これは、複数の産業が統合されるという意味で、一種の産業間関係の変化である。そこで事務機器の複合化事例を、既存の伝統的な産業枠組み、産業の境界線が崩れた事例として分析し、その複合化プロセスについて歴史的な既述を行うとともに、そのメカニズムを明らかにした。主としてプリンター企業側からの複合プロセスを辿り、その複合化プロセスにおける複数製品間での技術転用と深化も明らかにした。

（３）インクジェット・プリンター産業内における、プリンター本体と消耗品のインク・カートリッジとの間で生じたサブ産業間相互作用プロセス

インクジェット・プリンター産業は、プリンター本体市場とインク消耗品市場のふたつに大きく細分化される。その間には、プリンター本体と、そこに用いるためのインク消耗品という相互依存関係がある。しかし、非純正のインク・カートリッジを製造販売する企業の新規参入により、純正プリンターと純正インクとの間にあったはずの相互依存関係が断ち切られ、純正プリンターメーカーが、純正インク・カートリッジの販売を通じて利益を上げることが徐々に難しくなってきている。

そこで、非純正インク・カートリッジを製造販売する企業の動きも分析視野に入れながら、本体産業と消耗品産業との間で生じた相互作用を歴史的に明らかにした。そのうえで、純正消耗品市場が非純正品によって侵食されていくプロセスを明らかにし、消耗品ビジネスモデルを採用する企業が陥穽に陥るメカニズムを論じた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①藤原雅俊、消耗品収益モデルの陥穽：ビジネスモデルの社会的作用に関する探索的事例研究、組織科学、査読有、第 46 巻、第 4 号、2013、掲載決定。

②藤原雅俊、デンマーク：先進国で見る消耗品ビジネスモデルの陰り、赤門マネジメントレビュー、査読無、第 10 巻、第 7 号、2011、pp. 545-556。

③藤原雅俊、青島矢一、三木朋乃、東レ：逆浸透膜事業の創造プロセス、一橋ビジネスレビュー、査読無、第 59 巻、第 1 号、2011、pp. 118-135。

④藤原雅俊、Focusing on Inter-temporal Effects through Learning: A Short Note on Indigenous Perspectives on Strategic Management in Japan、京都マネジメントレビュー、査読無、第 19 号、2011、pp. 173-176。

⑤藤原雅俊、Innovation by Defining Failures under Environmental and Competitive Pressures: A Case Study of the Laundry Detergent Market in Japan、Copenhagen Discussion Papers、査読無、Volume 37、2011。

⑥天野倫文、藤原雅俊、インドプリンタ市場

のフィールドスタディ：日本のプリンタはどう使われるのか、赤門マネジメント・レビュー、査読無、第10巻、第2号、2011、pp. 65-96。

⑦藤原雅俊、産業間相互作用を通じた技術蓄積メカニズム、組織科学、査読有、第43巻、第2号、2009、pp. 84-96。

〔学会発表〕（計7件）
①藤原雅俊、消耗品収益モデルの陥穽：ビジネスモデルの社会的作用に関する探索的事例研究、組織学会関西支部研究会、2012。

②藤原雅俊、伊丹敬之、Inter-Temporal Effects through Learning: The Indigenous Perspectives on Strategic Management in Japan、2011 Academy of Management annual meeting, San Antonio-the USA、2011。

③藤原雅俊、Technology Accumulation in Interacting Industries: A Case Study of the Inkjet and the Digital Camera Industry in Japan、The 2011 Industry Studies Association Conference, Pittsburgh-the USA、2011。

④藤原雅俊、What has Changed in Japanese Business Systems?: A Study of Industrial Transformation、East Asia, Business Civilisations and International Order: interdisciplinary Workshop, Denmark、2010。

⑤藤原雅俊、積田淳史、Corporate Growth by Utilizing ICT: A Comparative Study on Two Traditional SMEs in Japan、International Workshop on SMEs in East and Southeast Asia, Denmark、2010。

⑥藤原雅俊、消耗品ビジネスモデルの落とし穴：プリンターは何故これほどまでサードパーティに浸食されているのか、日本経営学会関西部会、2010。

⑦藤原雅俊、Innovation in a Diversified Firm、European Academy of Management, Italy、2010。

〔図書〕（計3件）
① Peter Ping Li (ed.)、Routledge、Disruptive Innovation in Chinese and Indian Businesses: The Strategic Implications for Local Entrepreneurs and Global Incumbents、2013、pp. 199-217。

②日本経営学会編、千倉書房、経営学論集 第82集、2012、pp. 206-207。

③藤原雅俊、具承桓（編）、ICT イノベーションの変革分析：産業・企業・消費者行動との相互展開、ミネルヴァ書房、2012、207。

６．研究組織
(1)研究代表者
藤原　雅俊（FUJIWARA MASATOSHI）
京都産業大学・経営学部・准教授
研究者番号：20411019